

みなと

今・むかし新聞

第6号

平成19年3月

国道246号線

面白発見

今回は、国道246号線（通称・青山通り、正式名称・東京沼津線）の赤坂見附（写真左上）から青山一丁目交差点までを歩きました。



「見附は、江戸城の守り門」

江戸城の周囲には、「見附御門」が四十近くありました。そのひとつが「赤坂御門」です。

ここを起点にして、「庶民信仰」である「大山詣で」に江戸から伊勢原・大山まで大勢の人が向か

いました。庶民にとって唯一の楽しい小旅行です。両国の隅田川にありました「こり場」といわれる場所で、白装束姿で川の水をかぶり、心身を清めました。

それから、赤坂御門を通過し「六根清浄・・・」と唱えながら伊勢原まで一路、十六里（約六十四キロ）を歩きました。途中、二子玉川あたりで、休憩をとり、多摩川からとれる美味しい魚に舌鼓を打ったことでしょうか。港区で生まれた「岡本かの子」の実家は、ここ川崎・高津区です。高津区図書館には、岡本かの子コーナーがあります。

旧赤坂小学校の脇にあります「牛鳴坂」を上り、山脇学園を通過して、赤坂総合支所をぐるっと回

ると、また、青山通りに出ます。

岡本綺堂『半七捕物帳』の「津の国屋」

この作品には、「赤坂裏伝馬町の常磐津の女師匠文字春が堀の内の御祖師様へ参詣に行つて、くたびれた足を引き摺つて四谷の大木戸まで帰り着いたのは・・・」（出典・光文社文庫）と、幕末・江戸赤坂のまちの様子が描写されており、赤坂界隈での庶民の暮らしが、伝わってきます。

「豊川稲荷は、庶民の祈願寺」



「豊川稲荷」（写真上）

は、旧赤坂小学校の敷地を含めて名奉行・大岡越前守の屋敷内にありましたが、明治になって現在地に移転しました。

境内には、山口百恵・桜田淳子・森昌子三人の手植えの植樹があります。

また、青山通りに面した「堀」には寄進した方々の氏名が刻してあります。これを調査すると、寄進者の住居・職業がわかります。

「高橋是清翁記念公園」は、地域のオアシス

昭和十一年二月二十六日、いわゆる二・二六事件です。

雪降りしきる早朝、反乱軍が国の中枢機関を占拠しました。赤坂山王ホテル、割烹・幸楽等も使われました。

「兵に告ぐ」をNHKラジオ放送でお聞きになったかたもいらっしゃると思います。赤坂あたりは、大変な一日だったとお聞きしたことがあります。

鬱蒼（うつそう）と生い茂ったこの公園は、地域の人のオア



シスとして親しまれております。（写真上）

「昭和三十九年十月十日は、日本中が沸いた日」

昭和三十四年五月二

十七日、第十五回オリ

ンピック開催地が東京

と決まりました。当時

の東龍太郎東京都知事

は、「開催に準備に万全を期する」と決意表明しました。

以来、開催に向けて、準備が進められました。

青山通りの道路拡幅が行われました。東宮御所側の

石積みを解体し番号を振って、移動したそうです。そ

の結果、歩道も広がり歩き

やすくなりました。（写真

下）

NHKアナウンサー・北

出清一郎氏は、『世界中の

秋晴れを集めたような、今

日の東京の青空です。心浮

き立つ小関裕而の「東京オ

リンピックマーチ」が鳴り

響きます。選手入場が始ま

りました。ギリシャを先頭に……」と心弾む声で放

送しました。



その日の夕刊の見出しです。「九十四国が堂々入場

（朝日新聞）、「見事なドラマ 感動の行進五十分」（日

本経済新聞）、「世界の心ひとつに！ 日本晴れ 九十

四カ国参加」（読売新聞）、「世界はひとつ いまここに

天高く美しい開会式」（毎日新聞）。

あれから、四十二年――

青山交差点は、交通の要衝地。かつては、「路面電車」

が走り、品川・六本木・渋谷・四谷三丁目を経て新宿

へと各方面に繋がっていました。現在は、地下鉄に変

わり、「東京メトロ銀座線・半蔵門線」、都営地下鉄「大

江戸線」が交わり、一段と便利になりました。

道幅が変わり、建物が変わっても、この地に住む人

の「暖かい心」は、いまでも受け継がれています。

（清田 和美）

区内あちこち

釣堀坂（南麻布）

「釣堀坂」のある南麻布あたりは、どちらを向いても坂道ばかりだ。

最近配布された港区のガイドブックには残念ながら取り上げられなかったが、日本坂道学会会長、山野勝さんの発表された「東京グッと来る坂道ランキング」ではベスト5の一つとして「釣堀坂」が選ばれた。

本村小学校の裏側、校庭に沿って薬園坂に向かい下って登る百米位の短い手応えのある坂道がそれである。現在は、名前の由来の肝心の釣堀は廃業で姿は無いし、案内板のごときものも見当たらないが、釣竿を手にブラリと釣人がやって来ても全く異和感のない佇まい（た）が残っていて大満足である。

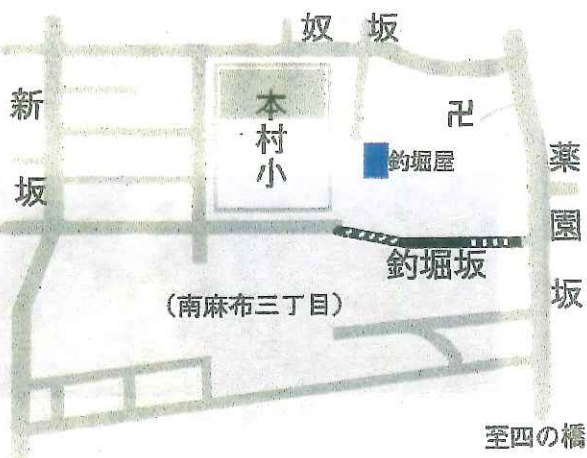
次に近所には今でも続いている釣堀屋さん（衆楽園）があると聞いて訪ねてみた。

小学校正門横の脇道を一寸入ると、普通の民家の庭に、小じんまりした釣堀が出現、目をパチクリ。

ここが麻布？という意外性、懐かしい空気にしばしばーとしてしまった。邪魔（ま）にならぬよう隅っこで覗かせてもらったが、静かに糸を垂らし、ただ魚（へら）とのやり取りを楽しむ遊び、何とも優雅（うや）な贅（ぜい）沢（たく）だ。

ところでこの堀、江戸の昔、この辺りの旗本が金魚養殖（ようじく）を内職にしたと聞いたことがある。その名残り（を）かなと思ひ始めたら、江戸が身近に感じられるようになっていた。

（武 恒雄）



2006

フェスティバルーン

語り部の会場賑わう

昨年十一月二日港区生涯学習センターで開催された第六回フェスティバルーンでは、私たち「語り部」も参画し、「生かそう昔 生きてる昔」を合言葉に、話や実演等々盛り沢山の企画を実行しました。

最初は、JR新橋駅から東京駅にかけて山手線や京浜東北線の電車が走る赤レンガ積みの高架橋について手書きの大判地図とスライドを使つての話。築造（きぞう）後百年近く経つていながら今なお現役という説明に皆さんが感嘆（かんとん）されました。その丹念な仕事は古き日本の良さを彷彿（ふふ）させます。スライドで紹介された有楽町駅直下の高架橋に取り付けられている街灯は昔銀座通りにあったガス灯に似てノスタルジーを感じさせるデザインでした。

レンガの積み方にもイギリス積みやドイツ積みなどいろいろな方式があり、諸外国の文化を積極的に導入し、日本の近代化に躍起（えき）だった往時が偲（おも）えます。港区内だけでなく横浜市内の建造物についても紹介がありました。ちなみに先のJRの高架橋はドイツ積みとのこと。



会場の壁面を使つて多数の風呂敷を展示。その多様な色と柄の風呂敷を眺めていると単に実用品であることを通り越して美術品との感じを受けたほど。中

には会員のご先祖様が豊後国（ぶんご）の森藩主久留島家から拝領（はいりやう）したという貴重な袱紗（ふくしゃ）も飾られて来会者の眼を惹きつけていました。風呂敷によるいろいろな物の包み方を先に会員が実演し、そのあと来会者にも実際に体験していただきました。特にワインの二本包みには興味を示された方が多く、紙袋に入れて持ち歩くよりもずっとおしゃれで、パーティにもこのうして持参したら格好良く盛り上がるの声もありました。

「語り部」では小学校からの要請（ようきう）を受けて学校へ出かけ生徒に昔の生活などについてお話ししております。話がより分かりやすいようにと紙芝居を制作することになり、その第一作としてこの前の戦争での小学生の集団疎開（そかい）の話を書き居りました。それを会場で初公開。

多数の来会者で会場は満席でした。ご来会の皆様には熱心に耳を傾けていただきましたこと感謝しております。区長、教育長にもご来会いただき有難うございました。（中嶋 弘）

注：豊後は大分県の一部



右の写真が本文中に記されている会員のご先祖が豊後・森藩主久留島家から拝領した袱紗です。図柄は染めではなくすべてが刺繍（しゅう）によるものです。この写真からでは判りにくいのですが、刺繍がもたらす独特の立体感に満ちていて、例えば人物の顔にしても類の膨らみがふつくと表現されております。なお大きさは縦横六十六センチ。

☆ なつかしい歌 ☆

明治三十五年生まれ、六人の子供を一生懸命育ててくれました父（九十九才没）の七回忌法要を済ませ遺品を整理して居りましたら雑記帳の二ページに梅干しの歌が書いてありました。十数年前だったと思いますが父が歌っているのを聞き面白かったとただ漠然（ぼく）と聞いて居りました。父がいつ頃歌っていた歌なのか、この詞が正しいのか今となっては知る由もありません。あの時にいろいろと聞いておけばよかったと後悔して居ります。

この歌はきつと好きな歌の一つだったと思います。梅の実の一生を面白く可愛らしく又人の心を暖かくしてくれる歌だと思えます。人間も一生の間には良い時つらい事いろいろあつて人生を終えます。梅の実と一緒にだどつくづく思いました。私も残りの人生、梅の実のように僅かでも人様の役に立つよう心掛け生きて行きたいと思えます。（金子 順子）



上は筆者の祖父の雑記帳に書かれてあったものです。この一文は明治43年から大正6年にかけての尋常小学校三年生用国語読本「巻五」目録の第十に載っていたことがわかりました。右下がその原文です。作者不詳。

二月、三月花ざかり
うぐいすなれた春の日の
たのしいときも夢のうち
五月、六月実がなれば
枝からふるい落とされて
近所の町へ持ち出され
何升何合はかり売り
もとよりすっぱいこのからだ
しおにつかつてからくなり
しそにそまつて赤くなり
七月、八月暑いころ
三日、三晩の土用干し
思えばつらいことばかり
それも世のため人のため
しわはよつても若い気で
小さい君らのなかま入り
うんどうかいにもついでゆく
ましていくさのそのときは
なくてはならぬこのわたし



芝公園の梅（平成19年2月撮影：井上 繁）

生涯学習センター通信

港区立青南小学校卒業生の中村草田男は、久しぶりに訪ねた母校の校庭を見ながら「雪と明治」を詠んだ句があります。

今は平成、昭和が遠く感じます。いまこそ、「昭和」の暮らしに光を当て「暮らし」「遊び」「学童疎開」「昭和三〇年の思い出」等多様な話を交わしながら記録し、その時の様子を一緒に子供たちに伝えませんか。

毎月二回、第二第四水曜日の午後二時から学習会を、当センター二階の「さくらだ記念室」で開催しています。お待ちしております。（清田 和美）

問い合わせ
3431・1606
平成十九年三月一日

港区立生涯学習センター

（次号は今年九月発行予定です）